

図書出版

文学通信

Bungaku-Report.com

中古文学会 2020.05 学会員限定 特価販売カタログ

特価期間 2020.7月末

価格 全品2割引

送料 実費

お支払い方法 郵便局の払い込み用紙を同封します

ご注文方法 メール info@bungaku-report.com

電話03-5939-9027

FAX03-5939-9094

お問い合わせメール info@bungaku-report.com

電話03-5939-9027

FAX03-5939-9094

■注意

ご注文の際には、

- 1○公費・私費の区別をお知らせ下さい。
- 2○公費の場合、公文書の宛名、日付の有無、納品・見積・請求書の枚数をお知らせ下さい。
- 3○送付先をお知らせ下さい。
- 4○ページの最後にFAX注文書をお付けしています。そちらもご利用ください。
- 5○稼働在庫一覧のエクセルファイルが以下にあります。**ここに掲載している本がすべて割引対象です。**

https://bungaku-report.com/shoten/Bookdata_bungakureport_new.xls

こちらをメールにて添付ファイルでお送りいただくこともできます。

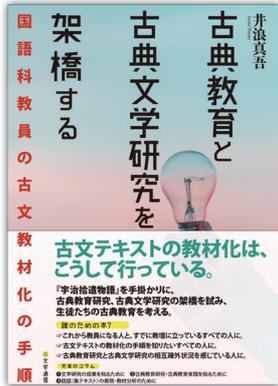


古典教育と 古典文学研究を 架橋する

国語科教員の古文教材化の手順

井浪真吾

ISBN978-4-909658-26-5
C1037
A5判・並製・344頁
定価:本体2,700円(税別)



古文テキストの教材化は、こうして行う。
 古典教育研究、古典文学研究の架橋を試み、生徒たちの古典教育を考える。
 「古典を勉強する意味ってあるんですか?」近年、こういった問いに対して応答する人が増えてきました。
 しかしその問いについて、古典文学研究者からの提言は「生徒の古典嫌い」をどう打開していくかに議論が集中し、教科書教材の面白い読み方、教科書に採録されていない古文テキストの紹介など、古典世界へのアプローチばかりが言い立てられています。そこでは「古典世界の奥深さ」「古典文学の魅力」など、古文テキストの価値は先験的に認められており、学習の意義との回路が明示されることはありません。
 古典文学研究者にとって古典教育の世界は、授業作り提案と実践報告、学習指導要領解説で埋め尽くされている、研究者が踏み込めない世界と映り、教員は時間的な余裕もなく、古典文学研究の細分化や領域拡張もあり、自らとの間に切実さが見えないものと映ってしまっています。では互いの相互疎外状況を変えていくにはどうすればいいのか。
 本書は、古典文学研究が明らかにしてきたものを生かし、古典教育研究や古典教育実践が明らかにしてきた古典教育の意義や目標と照合し、現在の古典教育をめぐる状況を踏まえながら、『宇治拾遺物語』を手掛かりに、教材化を試みた実践の書です。
 これから教員になる人と、すでに教壇に立っているすべての人に、古文テキストの教材化の手順を知りたいすべての人に、古典教育研究と古典文学研究の相互疎外状況を感じている人に。

【目次】序章 古典教育の課題／第一部 教材分析の方法—『宇治拾遺物語』の表現とその位相を考える／第二部 教材化の前に考えておきたいこと—古典教育の目標と古典教材を考え直す／第三部 教材化の構想—『宇治拾遺物語』を例に／参考引用文献／あとがき／索引(書名・人名・事項) 左開

古典は本当に必要なのか、 否定論者と議論して 本気で考えてみた。

勝又基編

ISBN978-4-909658-16-6
C0095
A5判・並製・220頁
定価:本体1,800円(税別)



古典否定派・肯定派の本物の研究者があつまって論戦に挑んだ、2019年1月の伝説のシンポジウム「古典は本当に必要なのか」の完全再現+仕掛け人による総括。古典不要論を考える際の基本図書となった本書を、これから各所で真剣な議論が一つでも多くされていくことを祈りながら刊行します。
 2015年のいわゆる文系学部廃止報道以来、人文学や文学、古典の危機について論じる会合は少なからず開催されて来ましたが、編者は疑問を持っていました。それらはすべて身内の怪気炎にすぎなかったのではないかと。本当にインパクトのある議論をするためには、反対派と対峙しないまま、必要論だけを語ってはダメだ...本物の反対派を招聘し開催せねば。そこで開催されたのが、2019年1月のシンポジウム「古典は本当に必要なのか」です。登壇者は、【否定派】猿倉信彦・前田賢一【肯定派】渡部泰明・福田安典【司会】飯倉洋一の各氏です。
 このシンポジウムは、インターネットでも中継され、使われたハッシュタグ「#古典は本当に必要なのか」は、センセーショナルでもあったため、シンポを離れトレンド入りし、多くの人がこのタグで、自らの古典観を語ることとなりました。

このシンポジウムで否定派が張った論陣はどのようなものだったのか。これに対して古典の研究者や中高の国語教員はどう反論したのか。その議論から浮かび上がった問題は何かだったのか。本書はその様子を再現したうえで、当日のアンケート、インターネットによるコメント投稿を収録し、登壇者のあとがきを加え、最後に編者自身の総括「古典に何が突きつけられたのか」(3万2千字)を収録します。本書全体で、より深い議論への橋渡しにしようとするものです。人文学や文学、古典の危機について考えていく際の必読書にはからずもなっています。

2刷



怪異をつくる

日本近世怪異文化史

木場貴俊

ISBN978-4-909658-22-7 C0020
A5判・並製・カバー装・396頁
定価:本体2,800円(税別)



怪異はつくられた!? 「つくる」をキーワードに、江戸時代を生きた人ひとと怪異のかかわりを歴史学から解き明かす書。人がいなければ、怪異は怪異にはならない。では誰が何を「あやしい」と認定して怪異になったのか。つまり、怪異はどうつくられてきたのか。そこにある様々なありさまを、当時の「知」の体系に照らし描ききる。章立ては、近世の怪異をつくった第一人者、林羅山からはじまり、政治、本草学、語彙、民衆の怪異認識、化物絵、ウヅメ、河童、大坂、古賀侗庵の全10章プラス補論3章。全方向から怪異のあり方を突き詰める、これからの怪異学入門が遂に誕生。怪異ファン必携。

【ある物事を怪異だと認識するのは、人間です。たとえ石が宙に浮いた、山を越えるほどの大きな蛇がいた、夜の川辺で小豆を磨くような音がしたなどの出来事も、人がいなければ、人が認識しなければ怪異にはなりません。つまり、人がいて初めて怪異は成り立つのです。こうした怪異に関わる人のいとなみを、本書では総じて「つくる」という言葉で表現してみたいと思います。

「つくる」といとなみは、多種多様です。怪異だと認識することも、当然「つくる」といとなみです。ある物事を誰がどのような理由で怪異だと決めたのか、その判断は、歴史性を帯びています。例えば、古代の律令国家では、国家つまり政権しか怪異の認定をすることができませんでした。もしも個人が勝手に「あれは怪異だ」と言いふらしてしまえば、その人は処罰を受けることが法で決められていたのです。誰(個人・共同体・国家など)がどのような理由で、特定の物事を怪異だと認識するのか、言い換えれば、誰が怪異を「つくる」のでしょうか。】.....「序章」より

【目次】/序章 怪異をつくる/第一章 林羅山 近世の怪異をつくった第一人者/第二章 政治 政から見る怪異/補論一 フィクションとしての怪異 林羅山『本朝神社考』『僧正谷』を読み解く/第三章 本草学 モノとしての怪異/補論二 『日東本草図纂』『怪説』巻から個性を見る/第四章 語彙① 辞書に見る怪異/第五章 語彙② 言葉の用法と新しい解釈/第六章 民衆の怪異認識/第七章 化物絵 描かれる怪異/第八章 ウヅメ 歴史的産物としての怪異/第九章 河童 人が怪異を記録するいとなみ/補論三 大坂 文化的な場と怪異/第十章 古賀侗庵 江戸後期の[怪異]をつくった儒者/終章 怪異を「つくる」ことから見えること/初出一覧・あとがき

六波羅探題 研究の軌跡

研究史ハンドブック

久保田和彦

ISBN978-4-909658-21-0 C0221
新書判・並製・240頁
定価:本体1,200円(税別)



「六波羅探題(ろくはらたんたい)」とはいったい何か。

承久の乱に勝利した鎌倉幕府が京都六波羅に設置した、「幕府の出先として朝廷を監視し、武家の安全のためにしっかりとがんばる」機関とされてきた、六波羅探題。本書は、その研究史を詳細に跡づけることで、その成立と展開、探題の発給文書、探題の職務と歴史的役割、鎌倉幕府・朝廷と探題との関係、鎌倉後期・幕府滅亡にいたる畿内の変化と探題の滅亡など、六波羅探題に関する様々な問題をわかりやすくまとめた書である。

同時に本書を通じ、六波羅探題の知名度を少しでも高め、また歴史学の研究において、研究史を詳細に跡づけることがどんなに大切かを、日本中世史の研究者をはじめとして、歴史に興味を持つ一般読者、さらに史学科の学生にまで、伝えていこうとする。172点の著書・論文を編年で並べた『六波羅探題 研究の軌跡』年表も備える。中世史ファン必携の書。

【目次】はじめに 「六波羅探題」ってなに/第一章 戦前の六波羅探題の研究/1 京畿および関西の諸政をすべ、兵馬のことを総掌する一和田英松の研究/2 六波羅は京都の重鎮一三浦周行の研究/3 六波羅探題の裁判管轄一石井良助の研究/第二章 戦後の六波羅探題の研究一通説の成立/1 訴訟制度上に占める六波羅探題の地位一佐藤進一の研究/2 六波羅探題の成立と構造一上横手雅敬の研究/3 鎮西における六波羅探題の権限一瀬野精一郎の研究/4 探題として成立を見なかった一五味文彦の発言/第三章 通説に対する異論の展開一本格的研究の開始/1 「六波羅-両使制」一外岡慎一郎の研究/2 公武交渉における六波羅探題の役割一森茂暁の研究/3 六波羅探題職員・組織の研究一森幸夫の研究/4 六波羅探題被官と北条氏の西国支配一高橋慎一郎の研究/5 六波羅探題発給文書の研究一久保田和彦の研究/6 六波羅探題の多角的・総合的研究一熊谷隆之の研究/7 公武関係と六波羅探題一木村英一の研究/第四章 その他の六波羅探題研究/1 在京人と簞屋番役一五味克夫の研究/2 在京人とその位置一五味文彦の研究/3 六波羅探題の裁判管轄について一稲葉伸道の研究/4 悪党召し取りの構造一近藤成一・西田友広の研究/5 金沢北条氏の研究一永井晋の研究/6 外岡慎一郎「六波羅-両使制」への批判一佐藤秀成・加藤克・本間志奈の研究/7 「西国成敗」の確立過程一工藤祐一の研究/おわりに一六波羅探題研究の今後の課題/あとがき・参考文献・『六波羅探題 研究の軌跡』年表



薩琉軍記論

架空の琉球侵略物語は

なぜ必要とされたのか

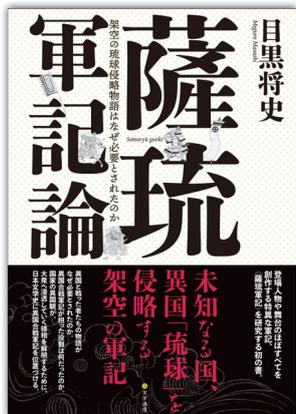
目黒将史

ISBN978-4-909658-20-3

C0095

A5判・上製・カバー装・784頁

定価:本体15,000円(税別)



未知なる国、異国「琉球」を侵略する、架空の軍記〈薩琉軍記〉。〈薩琉軍記〉とは、慶長十四年(一六〇九)の琉球侵攻を描いた軍記テキスト群である。実際には起きていない合戦を作りだし、様々な武将たちの活躍を創出した特異な軍記だ。本書はその〈薩琉軍記〉を研究する初の書である。異国と戦った者たちの物語はなぜ必要とされたのか。異国合戦軍記が担った役割は何だったのか。その成立、諸本の展開構造、享受の実態から、明らかにしていく。国家の異国観が、大衆へ浸透していく様相を解明するべく、日本文学史に異国合戦軍記を位置づけようとする野心的な書。本書には、東アジアにおける日本の視座が問われている昨今、時代やジャンルを超越し取り組むべきテーマが凝縮されているといっても過言ではない。文学研究者のみならず、歴史、思想史にも有益な書である。

【目次】序章 〈薩琉軍記〉研究の過去、現在／第一部 〈薩琉軍記〉の基礎的研究／第一章〈薩琉軍記〉諸本考／第一節 諸本解題／付節 立教大学図書館蔵「〈薩琉軍記〉コレクション」について／第二節 薩琉軍記遡源考／第三節 物語展開と方法—人物描写を中心に—／第四節 異国合戦描写の変遷をめぐって／第五節 系譜という物語—島津家由来譚をめぐって—／第二章 〈薩琉軍記〉世界の考察—成立から伝来、物語内容まで—／第一節 異国侵略を描く叙述形成の一齣—成立、伝来、享受をめぐって—／第二節 琉球侵略の歴史叙述—日本の対外意識と〈薩琉軍記〉—／第三節 描かれる琉球侵略—武将伝と侵攻の正当化—／第四節 偽書としての〈薩琉軍記〉—「首里之印」からみる伝本享受の一齣—／第二部 〈薩琉軍記〉の創成と展開の諸相／第一章—物語生成を考える—近世の文芸、知識人との関わりから—／第一節 近世期における三国志享受の—様相—／第二節 語り物の影響をさぐる—近松浄瑠璃との比較を中心に—／第三節 敷衍する歴史物語—異国合戦軍記の展開と生長—／第四節 歴史叙述の学問的伝承／第五節 蝦夷、琉球をめぐる異国合戦言説の展開と方法／第六節 予祝の物語を語る—〈予言文学〉としての歴史叙述—／第二章—甦る武人伝承—再生する言説—／第一節 渡琉者を巡る物語—渡海、漂流の織りなす言説の考察—／第二節 琉球言説にみる武人伝承の展開—為朝渡琉譚を例に—／第三節 語り継がれる百合若伝説—対外戦争と武人伝承の再生産—／第四節 為朝渡琉譚の行方—伊波普猷の言説を読む—／終章—琉球から朝鮮・天草へ—異国合戦軍記への視座—／資料篇／1 立教大学図書館蔵「薩琉軍談」解題と翻刻／2 国立公文書館蔵「薩琉軍鑑」解題と翻刻／3 刈谷市中央図書館村上文庫蔵「琉球征伐記」解題と翻刻／4 架蔵「琉球静謐記」解題と翻刻／5 架蔵「島津琉球合戦記」解題と翻刻／6 立教大学図書館蔵「琉球軍記」解題と翻刻／初出一覧・あとがき・索引(書名・人名・地名)

注釈・考証・読解の方法

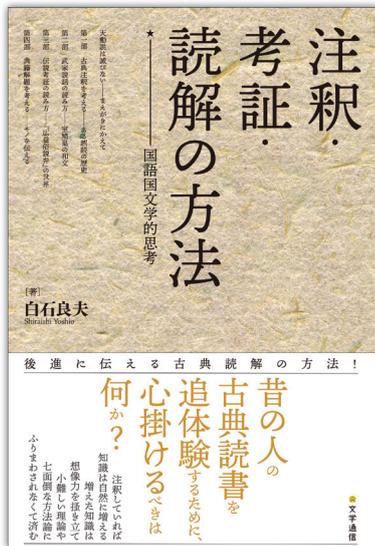
国語国文学的思考

白石良夫

ISBN978-4-909658-17-3 C0095

四六判・上製・288頁

定価:本体3,200円(税別)



注釈していれば、知識は自然に増える。増えた知識は想像力を掻き立て、小難しい理論や七面倒な方法論にふりまわされなくて済む——。

昔の人の古典読書を追体験するために、心掛けるべきは何か。後進に伝える古典読解の方法!

「後進に伝える研究方法」をコンセプトに、古典の注釈・考証・読解の方法を伝える。国語学と国文学、あるいは中古、近世、近代など、世間で勝手に作りあげられたジャンルや文学史の壁を遠慮せず乗り越え、古典を読み解くにはどうすればいいのか。先人に学びながら古典を読み解く術を、全四部「古典注釈を考える—ある誤読の歴史」「武家説話の読み方—室鳩巢の和文」「伝説考証の読み方—『広益俗説弁』の世界」「典籍解題を考える—モノを伝える」で伝えていく。対象とするものは、源氏、徒然、武家説話、考証随筆など幅広く、典籍解題の問題まで含めて論じる。

【目次】天動説は滅びない—まえがきにかえて／第一部 古典注釈を考える—ある誤読の歴史—／一章 オコヅク考、オゴメク考—源氏物語帚木卷の異文の解釈—／二章 オゴメク幻想—「オコヅク考、オゴメク考」補訂を兼ねて—／三章 徒然草「鼻のほどおこめきて」考—続オゴメク幻想—／第二部 武家説話の読み方—室鳩巢の和文—／四章 読み物になった手紙—「鳩巢小説」とは何か—／五章 書いたこと、書かなかったこと—写本と刊本の狭間で—／六章 忠誠心はかくあるべし—浄瑠璃坂敵討と殉死をめぐって—／七章 作品化される諫言—『明君家訓』から『駿台雑話』へ—／附 『明君家訓』の成立と版本—／第三部 伝説考証の読み方—『広益俗説弁』の世界—／八章 巨木伝説考証近世篇—熊楠稿「巨樹の翁の話」追跡—／九章 女流歌人伝説—檜垣岫説話をめぐって—／第四部 典籍解題を考える—モノを伝える—／十章 『十帖源氏』の異版と著者書入本—小城鍋島文庫本の位置づけ—／十一章 『烏丸光榮御口授』の成立と構成—国会図書館本を基にして—／十二章 『名家手簡』版本管見—近世の複製本—／附 シーラカンスの年齢—あとがき・初出一覧・人名・書名索引—



草の根歴史学の未来をどう作るか

これからの
地域史研究のために

黒田智・吉岡由哲編

ISBN978-4-909658-18-0
C0021
A5判・並製・カバー装・304頁
定価:本体2,700円(税別)



歴史学の新しい主戦場は、地域史だ！ 地域には、これまで縦割りに区分され、歴史史料としてみなされることのなかった手つかずの史料が膨大に眠っている。史料学の成果を地域史研究に生かすということを軸に、若い執筆者たちがさまざまな史料と格闘して生み出した書。金沢大学の卒業生・修士・大学院の修士・博士後期課程の在籍者・修了者らが執筆。執筆陣のほとんどは、北陸・東海地域の小・中・高校で学校教育に携わっている現職教員である。これからの地域史研究の参考になることを目指すべく、史料撮影、教材研究、教材の作り方、郷土史研究と地域学習、卒論指導に関するコラムも備えた、かつてない日本史論文集。編集は研究活動と同様、文化財調査・地域史研究に積極的に取り組んできた、黒田 智、吉岡由哲。

【目次】口絵／草の根歴史学の未来へ(黒田 智)／第一部 絵画史料を読む／第一章 鎌倉公方の天神像(山野 晃)／第二章 『遊行上人縁起絵』の手取川(市河良麻)／第三章 なぜ泥棒は風呂敷を背負うのか(木村直登)／[コラム1]イントロダクションができるまで(黒田智)／第四章 前田利常の鬼子母神(岡田彩花・鳥谷武史)／第五章 新発田藩主の肖像画(高澤克幸)／第六章 肖像写真の胎動—久田佐助コレクション(吉岡由哲)／[コラム2]史料撮影の五つのポイント(吉岡由哲)／第二部 寺社縁起と奇談／第一章 『赤洲大明神縁起』の誕生(木村祐輝)／第二章 大野湊神社と縁起(竹内 央)／第三章 夜の悪鳥・悪獣と女(土居佑治)／[コラム3]教材研究と史料学の役割(木越隆三)／第四章 忘れられた秀郷(高澤由紀)／第五章 水犬の怪鳥退治—羽咋地名考(河合 柚)／第六章 『江島五巻縁起』と仏牙舍利請来譚—慈悲上人良真と実朝の夢(鳥谷武史)／[コラム4]歴史教材の作り方(村井淳志)／第三部 歴史史料の可能性／第一章 能登土田荘公用銭状の研究(山科建太)／第二章 石動山史料と祈雨の記憶(小川歩美)／第三章 賤ヶ岳合戦の雪(中山貴寛)／[コラム5]郷土史研究と地域学習(宮下和幸)／第四章 「額氏系図」を読む—金屋彦四郎家の記録(加護京一郎・黒田 智)／第五章 加賀前田家年寄の後見制—本多政和を事例に(林 亮太)／第六章 東山の成立(西田夏希)／第七章 橋本左内の「建儲」(森石 顕)／[コラム6]大学における卒論指導(黒田 智)／「草の根歴史学」の未来を考えるためのブックガイド／絵画史料論を学びたい人へ(黒田智)／地域の川縁と記憶をたどりたい人へ(黒田智)／縁起・奇談のなかの真実を知りたい人へ(黒田智)／環境史の最前線を知りたい人へ(黒田智)／古文書・聖教調査をしたい人へ(藤巻和宏)／史料撮影に挑戦したい人へ(吉岡由哲)／歴史教育を一步前に進めたい人へ(村井淳志)／おわりに(吉岡由哲)／

なぜ古典を勉強するのか

近代を古典で
読み解くために



前田雅之

ISBN978-4-909658-00-5
C0095
四六判・上製・336頁
定価:本体3,200円(税別)



なぜ古典を勉強するのか。私たちが生きるこの時代は、古典的教養とは不要なものなのであろうか。過去とつながっている、今この時代を読み解く、実践的古典入門。全体を「古典入門」、「古典で今を読み解く」、「古典と近代の歴史を知る」に分け、レクチャー。「近代を相対しうる最も強力な装置が古典である」という著者の思想のもと、今とつながっている古典文学の新しい見方を次々と繰り出し、読む者の視界を広げ、古典を勉強する意義を伝える、刺激的な書。

【大きく断絶しているとはいえ、我々の言葉は過去と繋がっているといった意味で、古典的世界＝前近代社会の延長にある現在に生きていることも否定できない事実としてある。古典と近代を相互批判しながら、古典的世界を破壊した近代を批判し評価していくことを通して、より新鮮な気持ちで古典的世界、と同時に近代的世界と対峙することが可能となるのではないか。その先にはまだ見たことのない世界像が立ち現れるのではないか、勉強をしていて何が快感か。世界像なるものが見えるような線がうっすらと浮かんで来る時である。】

【目次】はじめに—勉強をしていて何が快感か／Part.1 古典入門 その1...教養と伝統の世界を知る／1 昔の人は教養があったのか／2 注釈学事始め／3 古典的公共圏とは何か—和歌が減びなかった秘密／4 伝統の作られ方／Part.2 古典で今を読み解く その1...歴史・伝統・古典／1 「日本共産党」の古典的意義／2 アメリカ、「新大陸」における伝統とは何か／3 天皇制度を永続させるために／4 品格ある二等国になること／5 日本における国・国民・国民主義—対抗原理なき国民主義は可能か／6 日本人論を終わらせるために—優越感なる劣情からの脱却／7 日本・日本人はどこにも行かないだろう／8 成績という文化—近代のアイロニー／Part.3 古典入門 その2...和歌と文化の厚みを知る／1 和文にスタンダードはあったのか—和歌のあり方とは／2 藤原俊成の古典意識—生き、活動する原点にあるものとは／3 アヴァンギャルドと伝統—孤語「忍ど忍ど」考／4 文化の厚みを知る方法—明星本『正広自歌合』をめぐる／Part.4 古典で今を読み解く その2...戦乱・和歌・古典／1 古典・和歌は平和の産物ではない／2 乱世到来、いよいよルネサンスだ／3 破局・古典・復興—精神の危機を乗り越えるために／Part.5 古典と近代の歴史を知る／1 国文学始動元年、明治二十三年の夢と幻滅—国学・国文学・井上毅／2 古典と出会う、戦時・戦中という時空—清水文雄『戦中日記』を読む／3 研究者共同体と大衆文化—その歴史と国文学の人畜無害化／



デジタル学術空間の作り方

仏教学から提起する
次世代人文学のモデル

下田正弘・永崎研宣編

ISBN978-4-909658-19-7
C0020

A5判・並製・384頁
定価:本体2,800円(税別)



ライブラリアン、コンピュータサイエンティスト、人文学者...複数のプレイヤーによって共同で創りあげる、デジタル学術空間という「知」のかつてない新たな形態にこれまでどう対応してきたのか。そしてこれから、どうデジタル学術空間を創っていくのか。仏教学から提起する書。

第1部「デジタル学術空間の作り方」では、SAT大蔵経テキストデータベース研究会がデジタル研究基盤を構築するにあたり実現してきたものを創成期(1994年)から現在までを詳述。第2部「仏教学とデジタル環境から見える課題」では、全体を「デジタル技術を作る・使う」「研究基盤を作る」の二つにわけ、研究者たちが課題の提起とともに、その解決の方向を示した。さいごに大向一輝(国立情報学研究所)によるコラム「デジタル学術空間の未来に向けて」で今後の展望を示す。

今後の人文学の展開には、日々生まれつつあるデジタル学知との対話が不可欠なものとなった現在、私たちは何をどう創り未来へと進むのか。その良きガイドになる書です。

執筆は、下田正弘、永崎研宣、小野基、船山徹、石井清純、八尾史、宮崎展昌、宮崎泉、若米地等流、蓑輪顕量、李乃琦、王一凡、青野道彦、落合俊典、高橋晃一、大向一輝。

【人文学の使命は、無意識にことばが使われることによって無反省に世界が構成されてゆく、その過程を反省的に照らし出し、そこに潜む問題を明らかにするところにある。同様に、デジタル媒体空間における次世代の人文学は、デジタル技術を使い、あらたな世界を生きる力をつけさせることに終始するのではない。やがて無意識化するだろう、その活動を外から反省的に分析し、問い返すところはまだ進まなければならない。

ことばが構成する概念や事態を分析する力を発揮し世界を解明してきた人文学には、今後、情報通信技術が構成する概念や事態を分析する学問へと、あらたに成長を遂げることが期待されている。言語活動を批判するためには言語が習得されなければならないように、技術を批判するためには、技術を習得する段階を経なければならない。しかるに、声から文字へ、文字からデジタルへ、という歴史における展開は、言語が自身のより遠くの外へと向かい、そこから自身へと還帰する運動である。それは、振幅に相違があるものの、人文学が長い歴史のなかで寄り添ってきた運動にほかならない。】...epilogue 人文学の将来(下田正弘)より

ネット文化資源の読み方・作り方

図書館・自治体・

研究者必携ガイド



岡田一祐

ISBN978-4-909658-14-2 C0020

A5判・並製・232頁
定価:本体2,400円(税別)



私たちが残すものは、私たちそのものだ。

インターネット環境において、文化資源のコレクションをバーチャル空間に作り上げる営みについて、多くの事例から縦横無尽に論じる書。日々変わりゆく社会のなかで、資料の公開やその方法論をどう考えて、理路を立てていけば良いか。文化を残すとはどういうことなのかという根源的な事柄から、デジタル・ヒューマニティーズの最新の成果や、情報発信の問題等々、これからのガイドとして、入門として、必読の書です。

本書はメールマガジン『人文情報学月報』(人文情報学月報編集室発行)の連載「Digital Japanese Studies 寸見」の2015年4月号掲載の第1回から2018年12月号掲載の第45回までの原稿をもとに加筆修正の上、関係画像を差し込むなどの編集を加え刊行するものです。

【...ではなにをどのように残していけばよいのでしょうか。単純明快な解ではありませんが、こと文化に関するものであるかぎり、集まったものが意味を織りなすひとつの、あるいは重なり合うコレクションとして次の世代へと渡すことが重要ではないでしょうか。

本書は、そのなかでも、インターネット環境において文化資源のコレクションをバーチャル空間に作り上げる営み(ネット文化資源と呼ぶことにします)について注目し、変わりゆく社会のなかで、そのなかで資源を読み解き、あるいは織りなすことを論じてみたいと思います。ここでは特に、インターネット上にある文化資源の総体というよりも、個々の、漠然とはしていたとしても、あるていどまとまりのある資源の集まりに着目したいと思います。】...「はじめに」より

【目次】はじめに/タグによる本書の歩き方MAP/・2015 第1回～第9回/・2016 第10回～第21回/・2017 第22回～第33回/・2018 第34回～第45回/【付録】パスファインダー/・デジタル・コレクション/・セマンティックウェブ/・オープンデータという思想/・コレクション形成・図書館史/・デジタル人文学/索引/デジタル日本学なるもの-後書きに代えて



国語の授業の作り方

はじめての授業マニュアル

古田尚行

2刷

ISBN978-4-909658-01-2 C1037

A5判・並製・320頁

定価:本体2,700円(税別)



教育実習生とその指導教員のために。これから教員になる人と、すでに教壇に立っているすべての人に。本書は、中学校・高等学校で初めて授業をすることになる教育実習生を念頭に、実際に国語の授業を組み立てていくノウハウを、授業を詰めていく過程や、振る舞い方や言葉遣い、それらを支える考え方や思想、またその意味など、いわゆる暗黙知とされている部分まで踏み込み、言語化して伝えます。全体を「授業の前に」「授業中のこと」「授業の後に」「授業作りのヒント集」「授業作りで直面する根本問題」「授業の作り方・事例編」「教材研究のための文献ガイド」の7章で構成。

どのような学校に勤めようが、どのような授業になろうが、それらに適応する普遍的な国語の授業方法や視点があるとの考えから述べられているので、既に現場に出ている教員にとっても、普段の授業を見直すことができるものにもなっています。また本書で提示される具体的な授業作りは、教育現場と文学・語学研究の場との乖離の問題をより深く見つめ直せるものにもなっています。国語教育や文学研究に携わる人すべてに読んでもらいたい、はじめての授業マニュアルです。

【今回、私が本書で述べてきたことは一人の授業者の「暗黙知」を言語化するという営みです。いろいろな実践を収めた書籍や論文には優れたものも多いのですが、それらの多くは「なぜ」その学習過程にしたのか、その理論的な枠組みはどのような目標や目的において援用されたのかを説明するものはあっても、そして具体的な問い方やアプローチやその授業の成果や課題は述べられたとしても、そこからさらに実際の授業を詰めていく詳細な振る舞い方や言葉遣い、それらを支える考え方や思想、その意味を一つの流れの中で説明しているものは少ないように思います。...(中略)...「体験しないとわからない」ような知の説明は少しでも言語化されて開かれていく必要があると思いました。この目的がどこまで達成できたのかは心許ないのですが、本書の内容が少しでも役に立ち、そして本書を読んで読者から声(賛同する声、批判する声も含めて)が上がっていくことがあれば、筆者としてはこれにまさるものはありません。】...「おわりに」より

【目次】はじめに／第1章 授業の前に／第2章 授業中のこと／第3章 授業の後に／第4章 授業作りのヒント集／第5章 授業作りで直面する根本問題／第6章 授業の作り方・事例編／第7章 教材研究のための文献ガイド／参考文献・キーワード索引

歴史情報学の教科書

歴史のデータが世界をひらく

国立歴史民俗博物館監修
後藤 真・橋本雄太編

2刷

ISBN978-4-909658-12-8 C0020

A5判・並製・208頁

定価:本体1,900円(税別)



人文学に必要なこれからの情報基盤の作り方は。複数の手段を用いて、新たな歴史像に迫るために。情報を共有して課題を解決するプラットフォームを構築するために。情報を可視化して、社会の深層にコミットしていくために。

人文学は社会そのものを考え、社会のあるべき姿を考える学問である。その可能性を追求するために、強力な援軍となっている歴史情報学の現在と未来を解説し、学問の基盤の今後を問いかけ、参加を促す。歴史情報学で出来ることを、まずは知るところからはじめよう!人文学研究者はもとより、行政機関、図書館・博物館等の学術機関などに必ずさわる方必携の書。

【目次】はじめに／chapter1 人文情報学と歴史学 後藤 真(国立歴史民俗博物館)／chapter2 歴史データをつなぐこと-目録データ- 山田太造(東京大学史料編纂所)／chapter3 歴史データをつなぐこと-画像データ- 中村 覚(東京大学情報基盤センター)／●column.1 画像データの分析から歴史を探る-「武鑑全集」における「差読」の可能性- 北本朝展(ROIS-DS人文学オープンデータ共同利用センター/国立情報学研究所)／chapter4 歴史データをひらくこと-オープンデータ- 橋本雄太(国立歴史民俗博物館)／chapter5 歴史データをひらくこと-クラウドの可能性- 橋本雄太(国立歴史民俗博物館)／chapter6 歴史データはどのように使うのか-災害時の歴史文化資料と情報- 天野真志(国立歴史民俗博物館)／●column.2 歴史データにおける時空間情報の活用 関野 樹(国際日本文化研究センター)／chapter7 歴史データはどのように使うのか-博物館展示とデジタルデータ- 鈴木卓治(国立歴史民俗博物館)／chapter8 歴史データのさまざまな応用-Text Encoding Initiativeの現在- 永崎研宜(人文情報学研究所)／chapter9 デジタルアーカイブの現在とデータ持続性 後藤 真(国立歴史民俗博物館)／●column.3 さわれる文化財レプリカとお身代わり仏像-3Dデータで歴史と信仰の継承を支える- 大河内智之(和歌山県立博物館)／chapter10 歴史情報学の未来 後藤 真(国立歴史民俗博物館)／おわりに／用語集 学会・雑誌案内 大学案内



※本紙でご注文いただければ学会割引を適用いたします。あるいはメール info@bungaku-report.comまでご注文下さい(学会注文書での注文であるとお伝え下さい)。

●注文内容

著者1	書名	冊数	公費・私費
前田 雅之	なぜ古典を勉強するのか		公費・私費
古田 尚行	国語の授業の作り方		公費・私費
西 法太郎	三島由紀夫は一〇代をどう生きたか		公費・私費
染谷 智幸編	全訳 男色大鑑〈武士編〉		公費・私費
染谷 智幸編	全訳 男色大鑑〈歌舞伎若衆編〉		公費・私費
白戸 満喜子	紙が語る幕末出版史		公費・私費
西脇 康	新徴組の真実にせまる		公費・私費
海津 一朗	新 神風と悪党の世紀		公費・私費
はちこ	中華オタク用語辞典		公費・私費
ビュールク トーヴェ	二代目市川團十郎の日記にみる享保期江戸歌舞伎		公費・私費
叢の会編	江戸の子どもの絵本		公費・私費
鈴木千恵子	杞憂に終わる連句入門		公費・私費
後藤 真編	歴史情報学の教科書		公費・私費
長島弘明編	〈奇〉と〈妙〉の江戸文学事典		公費・私費
岡田一祐	ネット文化資源の読み方・作り方		公費・私費
飯倉洋一編	真山青果とは何者か？		公費・私費
勝又基編	古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。		公費・私費
白石良夫	注釈・考証・読解の方法		公費・私費
黒田智編	草の根歴史学の未来をどう作るか		公費・私費
下田正弘編	デジタル学術空間の作り方		公費・私費
目黒将史	薩琉軍記論		公費・私費
久保田和彦	六波羅探題 研究の軌跡		公費・私費
木場貴俊	怪異をつくる		公費・私費
堀口 悟編	江戸初期の香文化		公費・私費
速水香織	近世前期江戸出版文化史		公費・私費
前島美保	江戸中期上方歌舞伎囃子方と音楽		公費・私費
井浪真吾	古典教育と古典文学研究を架橋する		公費・私費
空井伸一	「国文学」の批判的考察		公費・私費
地方史研究協議会編	日本の歴史を解きほぐす		公費・私費

●公費の書類内容

宛名					日付	あり・なし
書類枚数	納品	通	見積	通	請求	通

●送付先

お名前					
住所	〒 _____				
	お電話				

文学通信・刊行図書一覧↓こちらでタイトルをご確認ください。

<https://bungaku-report.com/about/books.html>